小手鞠荘は末期です。……詳しく。
【特別書き下ろし】
入門編・小手鞠荘の割とどうでもいい一日
著：月島雅也
イラスト：をん

夜。

ぼんやり星空を眺めていて、こう思うことはないだろうか。

この広い宇宙には、本当に地球人しか生命体がいないのかな。こんなにたくさん星があるんだから、どこか一つぐらいには宇宙人が住んでるんじゃないかな、と。

アパートの屋上に寝転がりながら、僕はよくそんな類のことを考えたものだ。

宇宙人は必ずいる、ただし地球人と出会う確率が限りなくゼロに近いだけだ――なんてことをよく耳にするけれど、でもそう考えてしまうとちょっと寂しいような気がする。会えないのなら、それは存在していないのと同義だ。きっとこの星々のどこかに誰かがいて、きっといつか会える日が来るんだ、って考えてた方が、ずっとずっと楽しい。

そして実際問題として、僕は本当に宇宙人に会ってしまった。

ある日宇宙船が降ってきたのである。そしてそこから、宇宙人が降りてきたのである。

いやホントに。

もちろん、まさかそんなことが起こるとは思っていなかったのでメチャクチャ驚いたのだけれど、何だかんだで今、その宇宙人たる彼女がどうしているのかというと――

僕のアパートの、隣の部屋に住んでいる。

◆

僕が住んでいるアパート、小手鞠荘は、狭いしボロいし変人ばっかり（おまけに宇宙人までもが）住んでいるという、ちょっと他にはなさそうな物件である。キッチンやリビングやお風呂なんかは共同、家事は当番制の持ち回りなので、アパートというより学生寮みたいなものを想像してもらったらいいかもしれない。

そんな小手鞠荘で、僕は日々女性陣からちょっかいをかけられたり、ちょっかいをかけられたり、ちょっかいをかけられたりして過ごしている。はっきり言って面倒くさいことこの上ないのだけど、でも本気で出て行きたいと思わないのは、屋上から見る星空が気に入っていることと、その変人な他の住人たちのことがそんなに嫌いじゃないからだ。僕と同じ高校の仲間もいるし。

あとはまあ、隣に住んでいる宇宙人というのが、結構かわいかったりするのだけれど……まあそんなことはいいや、うん。

「あっ、春樹さーん」

噂をすれば影、遅めの朝食後のリビングで何をするでもなくソファーに座っていた僕に声をかけてきたのは、その宇宙人、ライムだった。にこにこしながらこっちへ近付いてくる。

「何してたんですか？　眠そうですよ」

ふふ、と柔らかく微笑む天使か女神みたいな顔。透き通るような肌に引かれた薄い唇。
糸状にしたサファイアに陽の光を含ませたような、軽くて長くて碧い、柔らかな髪。
ちょっと人間離れしたような魅力の彼女は、実は地球の人間ではない。とはいえ、今こうして僕の目の前にいる姿は、僕たち地球人と何ら変わりない。誰が見たって普通の可愛い女の子にしか思えないはずだ。だからこそ、ライムが宇宙人だなんてことを取り立てて意識する場面はあまりないのだけれど。
「あー、うん、ちょっとぼーっとしててさ」日を追うにつれ過ごしやすくなってくる春休み、今日は陽射しも温かい。春の陽気と食後の満腹感が相まって、眠くもなろうというものだ。
「ライムこそ、何してるの？」
「はい、ちょっとお料理でもしようかと思って」
「え」
一瞬、思わず言葉に詰まる。
「あ、お料理というか、お菓子なんですけれど。あの、この間作ったゼリー、また作ってみようかと思って。……その、春樹さんにも、気に入ってもらえて、嬉しかったですし」
えへ、と恥ずかしそうにする彼女は実に可愛かったのだけれど、しかしそこに気を取られている場合じゃない。
「……あ、ああ、あれね。うん、あれは確かに美味しかった……んだけどさ、えっと、それはいいんだけどさライム……」
「何ですか？」
「いや、その……もしかして、一人で作るの？」
恐る恐る尋ねた僕に、
「はいっ」
とライムは力強く頷いた。
「大丈夫です、もう作り方はばっちり覚えました！　それに、なんだか今日はパワーが充実してる気がするんです」ぐっ、と小さく拳を握るライム。「頑張って美味しいゼリー作りますから、待っててくださいねっ」
「あー、えっと……」
何か反論しなくては、とは思うのだけれど。
こんなにやる気になっている子の笑顔を潰すなんて、僕に出来るはずもなく。
「……う、うん、じゃあ楽しみにしてるから、頑張って」
お任せですっ、と悪魔もイチコロであろう笑顔で微笑むライム。
小さくハミングを口ずさみながら、食堂を抜け台所へと向かうその背中に、しかし僕は一抹どころか両手いっぱいの不安を感じていた。
「……」

困った、どうしよう。

「あれ、春樹さん？」

「あ、えっとさ、よかったら何か手伝うけど」

迷ったけれど、やはり放っとく訳にはいかない。

「あ……その、手伝っていただけるのは、嬉しいんですけど……」

「？」珍しく何か言いにくそうな様子のライムに、僕は首を傾げる。

「えと……と、とにかく、春樹さんのお手を煩わせなくても、わたし一人で大丈夫です」

「え、そ、そう？」

ていうかそれぐらい別に煩わしくも何ともないんだけど……とは思ったけれど、何か様子が変なのでわざわざ口に出すのは止めておいた。

「じゃあ、ここで見ててもいい？」

「え？　そ、それは構いませんけど……は、恥ずかしいです……」

「あ、ご、ごめん」

そりゃそうか、手伝いもせずにじろじろ見ているだけなんて、ダメだよな。

しかし目を離す訳にもいかないので、食堂からそっと見守ることにした。

「ええっと、まずは……小麦粉とお塩……」何ぃ⁉「あ、違った、えっと、ゼラチンと……お砂糖お砂糖」

……いやうどん作るんじゃないんだから。

「ゼラチンってどこにしまったんでしたっけ……あっ、道具も出しておかないと……ボウルとフライパンとお鍋……それから、包丁包丁……」

フライパンっているのかなあ……ってちょっと待てゼリー作るのに包丁いるか⁉　せいぜい完成品を切るときぐらいだろ⁉

ああもう、見てるだけで冷や汗が出てくる。かと言ってこのまま放っとけないし、止めることも手伝うことも出来ない訳で……まいったな、なんでこんなやる気になってんだろ。

はあ、とため息をついた瞬間――

ガシャーン！

「きゃっ……！」

はっとして、慌ててキッチンへ駆け込む。

「ラ、ライム、大丈夫⁉」

「あ、す、すみません……お鍋、落っことしちゃって」

「そっか、怪我しなかったんならいいんだけど……びっくりしたよ」
「ごめんなさい、でもわたしもびっくりしちゃいました」
恥ずかしそうな様子のライムは、まあやっぱりかわいいんだけど、しかしやっぱり不安でしょうがない訳で。
「……」
……さて、大体お気付きかとは思うけれど、ライムは物凄く料理が苦手である。いや、実は料理だけじゃなく、家事全般において壊滅的に不器用なのだ。皿を運べば全て割り、お風呂を洗えば足を滑らせ、洗濯物は干す前に地面へブチ撒ける。天然ドジスキル満載だ。それでも、本人の一生懸命さもあって、小手鞠荘にやってきた当初に比べたら少しずつマシになってきてはいるんだけど……しかし。
ただ一つ、料理だけはいつまで経っても上達しないのだ。ドジというか、もはやどこかで料理の神の怒りでも買ってしまったのではないかと疑ってしまうほど。
ライムが家事当番のときには基本的に誰かがサポートに入ることにしているが、料理だけはそもそも当番から外した方がいいレベルなのである。ライム本人だって、自分の腕前は重々承知しているはずだ。
前に、そんな彼女が初めて上手く作れたのが、ゼリーだったりするのだけれど……それも皆の監督下において、の話だったし。

「あのさ、やっぱり手伝おうか？」
「え？　い、いえ、大丈夫ですよう、あの、わたし一人で……」
鍋を拾い上げながらライムが言う。うーん、さっきから何こだわってるんだろ？
「でもさ、ライムがホントに怪我しちゃったら、僕も嫌だし」
「それは、その……」
「あ、もしかして、あんまり僕に手伝って欲しくない？」それはそれでちょっとショックだけど。
「そっ、そんなことないですっ」突然慌てたように叫ぶライム。
「へ？」
「あ……え、ええと、あのその、そういうことじゃなくてですね、えっと、えっと……」
あわあわと慌て始めるライム。
と、次の瞬間、ぱたぱたさせていた右手がふとボウルの端に引っかかり――
「ふぇっ⁉　……あっ、きゃっ……！」
バッシャァン！
ボウルの中の液体が、テコの原理で思い切りライムへとぶっかけられる。
「うわっ」
思わず一瞬目を閉じてしまった。

そして、次に僕が目を開けたときには――

「……あっ、ラ、ライム！」

今の今まで目の前に立っていたはずの少女の姿は、もうどこにもなかった。

ただ、床一面の（ボウルに入っていたのであろう）氷水の中に、彼女の着ていたワンピースが落ちている。その内部に、不自然な体積を湛えたまま。

そして次の瞬間、

「……うう、は、春樹さーん……」

ワンピースから、声が聞こえてきた。

同時に、薄く青い、それこそゼリーのような何かが、ニュ、と襟から文字通り顔を出す。そして僕はその『何か』に話しかけた。

「ライム、大丈夫？」

「は、はい……ううっ、わたし、またやっちゃいました……あうう」

ワンピースから覗かせているのは、青く透き通ったライムの顔。

そう。

彼女は宇宙人。

普段の見た目は、僕たちと何も変わらないのだけれど。

その実は、スライム型の、宇宙人なのである……。

「ほ、本当にすみません、春樹さん……」

しおしおと小さくなって床を拭くライムは、もう元の人型に戻っていた。

「いいっていいって、これぐらい手伝うよ……別にわざとじゃないんだしさ」それに、きっかけ作っちゃったのは僕なんだし。

一緒に床を拭きながら、しゅんとしているライムにそう言う。やる気になっていた反動か、すっかり落ち込んでいる様子だ。

「うう……や、やっぱり自分一人だけでなんて、無謀な挑戦でした……」

「まあまあ……」僕は最初からそう思ってたけど、なんてのは口に出さずにおく。

はう、とため息をつくライムの服は、もちろん着替え済みだ。びしょ濡れになってしまった白のワンピースから、今は薄いピンク色へ。

「それに、また思わずスライム化しちゃいましたし……もう少しコントロール出来るようにならないと……」

「いやでも、本能っていうか、反射的にそうなっちゃうんでしょ？　だったらしょうがないよ」

「そうなんですけれど、でもあんな量の水ぐらい、我慢出来ないと……それに、地球の方の前

でうっかり形態変化しちゃったら、やっぱりダメなんですよね？」うーん、まあ確かにそれは困るんだけど。「小手鞠荘の中でさえこれなんです、外でなんか、どこから水が襲ってくるか解りませんし……あうう」

襲ってくるっていうか、自ら引き寄せてるような気がしないでもないけど……うん、まあ、これも言うのは止めとこう。

さて。

ここらで彼女の――宇宙人としての彼女たち種族のことを、説明しておこうかと思う。

スライム、そう、スライムである。スライム型宇宙人。

ぷにぷにとしたゼリーみたいな姿と、今僕が見ているような、ごくごく普通の人間の姿と、どちらにも形態を変化させることが出来るのだけれど――ただ、スライム型が所謂本来の姿なのかというと、そうでもない。

要は、「スライムが人間の姿に化けている」とかそういう訳じゃあない、ってことだ。もしそうだったとしたら、他人に変身して成りすましたり、何でも好きな姿に変化出来そうなものだけれど、そういうことは無理らしい。むしろ人型が本体で、一応スライムにもなれますよ、みたいな感じで考えておいた方が解りやすいかも。ライムの星でも、普段は皆、人型で生活してるって話だし。だからこそ、地球でも地球人のフリして普通に生活出来るのだ。

しかし、そこで問題になってくるのが水である。

僕たちが肩を叩かれると思わず後ろを振り向いてしまうように、ライムたちは水と接触してしまうと思わずスライム化してしまう、らしい。何とも不便な特性だけれど、不意にではなく予め意識しておければ（例えばお風呂に入るときとか）大丈夫だそうだし、そもそも少々水を被ったぐらいでは何ともない。……はずなのだが、ライムはどうも敏感肌（？）らしく、こうして天性のドジを活かしたあげくアパート内で水を被り、スライム化してしまうこともしばしば。

今のところは何とかなっているけど、気を付けていないとホントに外でこうなっちゃいそうで不安と言えば不安だ。

ただ、まあ……。

「……」

んしょ、んしょ、と床を拭いているライムの横顔を見ながら、ぼんやりと僕は思う。

ライムたちは、人型のまま腕だけをスライム化させて伸ばしたりだとか、身体の色だけを変えたりすることも出来る。……こういうことを言うとちょっとアレなのだが、僕は碧く透き通った彼女の色が、とても綺麗で神秘的に思えて、結構好きだったりする。初めて見たときから、ずっと。

だから、大騒ぎになるという社会的な理由はもちろんだけれど、個人的な感情としても、あんまりライムのあの姿を大っぴらにしたくないというか……僕だけが知っている、という優越

感みたいなものを持っていたいというか……いやまあ他にも知ってる人はいるんだけど、でも純粋にあのライムを綺麗だって思ってるのはきっと僕ぐらい……って、何考えてんだ僕は。

「？　春樹さん、どうかしましたか？」

慌てて頭を振った僕に、ライムが不思議そうに首を傾げる。

「あ、ご、ごめん、何でもない」

そうですかー、とまだちょっと不思議そうな顔のライムから逃げるように、彼女に背を向けて再び床を拭き始める。顔が赤くなっていたら困るからだ。

「……よし、こんなもんかな」

二人がかりだったので、五分もあれば見事に床を拭き終えることが出来た。

「そうですね。ごめんなさい春樹さん、手伝ってもらっちゃって」

「ぜーんぜん。気にしなくていいって」

別に大したことはしてないのだけれど、

「……はい、ありがとうございますっ」

そう言ってにっこりと笑うライムを見ると、手伝った甲斐があったというものだ。

「何をニヤニ」

「うおわああっ⁉」

「ヤされているのですか春樹様」

突然後ろからかけられた声に、思わず驚いてしまった。

「あら、エステア」

ライムの言葉に、僕も後ろを振り向く。

「い、いたんですかエステアさん……ていうかいきなり声かけるの止めてくださいよ」

「お掃除は終わったようでございますね」人の話聞けよ。

赤みがかった長い髪に、感情のない精緻な美しさの顔、そしてそれらを包む隙のないピタリとした雰囲気。僕たちより明らかに年上の、大人の女性。

ふわりとした不思議な感じの帽子を被っている彼女はエステアさん――小手鞠荘に住んでいる、もう一人のスライム型宇宙人である。ライムが小さい頃からのお世話係（そう、実はライムは超が付くお嬢様なのだ）で、地球へもライムと共にやってきた。箱入り娘であるライムの面倒を一手に引受けているところから解る通り、確かに凄腕、あらゆる場面で活躍する万能選手である。小手鞠荘においてもその家事スキルを遺憾なく発揮し、とても役に立ってくれているお人……なんだけれど。

ただ、一つ問題なのは、常に無表情かつ淡々としていて、感情を表に出さない――のはともかく、肝心の性格に少々難アリで。

「しかしライム様、また家の中でお水をひっくり返されるとは、注意力が足りません」
「うう……はい」
「春樹様が常にライム様のお身体を狙っておられるのですから、あのような性的プレイ一歩手前の行為はなさらぬよう」ちょっと待てこら。「軟体動物フェチの春樹様の前でむやみにスライム化しては、白昼堂々、貞操の危機が」
「ありませんよ！　好き勝手言わないでください」
「ああ、標的は私の方でございましたか。ご心配なく、全力でお断り致しますので」
「あんたでもねえよ！　……ていうか、エステアさん、見てたんですか？　いつから……」
「ライム様が揚々と『作り方はばっちり』などと意気込んでいた頃からでございますが」
それ最初からじゃねえか！
「だ、だったらもっと早く声かけてくださいよ！　今まで何してたんですかっ」
「床拭きをお手伝いするのが面倒でしたので、自室に戻り部屋の模様替えなどを」そっちの方が面倒だろ。
「まったくもう……」
「よろしいではありませんか、床拭きにかこつけてライム様の胸ばかりご覧になっていらっしゃったのですから」
「なっ、だ、誰がですかっ」何言ってんのこの人？

「ふ、ふぇっ！？」突然引き合いに出されたライムが目を白黒させる。
「ライム様、そのように胸元の緩い服であまり屈まれますと、春樹様のような変態には格好の餌食として目に映ることになる訳です」
「ねえよ！」
「失礼、ド変態でございましたね」
だから話聞け！
ああもう、と僕はぐったりしてため息をついた。
こんな感じで、感情を出さぬまま淡々とふざけ倒して人を馬鹿にするという物凄く鬱陶しい一面を持っているのが、このエステアさんなのである。もちろんこの間、顔はピクリともせず無表情のまま。何考えてんのかホントに解らない。
「……大体、そんなこと言うなら出てきてライムに教えてあげればいいじゃないですか……そもそもエステアさんが掃除してくれた方がずっと早いのに」
「他人の厄介事を押し付けられるのは本意ではありませんので」あんた世話係だろ？「それに、そのような搦め手に乗る訳には参りません」
「搦め手？」
「私に掃除を手伝わせる振りをして、今度はこの私の胸元を視姦しようとは、尋常ならざる性欲でございますね」

野郎じゃないけどいい加減にしろよこの野郎。

このように基本的には僕を小馬鹿にしてくれるのだけれど、主人であるはずのライムに対しても遠慮がないというか、結構フツーにふざけた発言を繰り返すので始末に負えない。主従関係はほとんど逆転しているのではないだろうか。掃除を手伝ってくれなかったのだって、たぶん面倒だったんじゃなくてそっちの方が面白そうだったからだろう（何が面白いのかは知らないけど）。

何とも厄介な人だけど、まあ普段はきちんとあれこれやってくれるのでまだマシだ。

そう。小手鞠荘にはもう一人、全然マシじゃない人がいるのである。

「たぁぁぁぁいへぇぇぇぇん！」

何か効果音が聞こえそうなほどの勢いで廊下からダイニングに飛び込んできた影が一つ。

「考えた傍から出たよ……」はあ、とため息。

ピチピチのチューブトップに短いホットパンツ、そしてそんな服装だからこそ余計に強調される、グラビアアイドルみたいな身体のライン。

大人っぽく、綺麗で格好いい顔立ちのお姉さんは、非の打ち所がない美人だ。僕としてもそれは認めざるを得ない。

しかし残念ながら……その美女は、口を開いてしまう。

「何よハルちゃん、出たって何が？　射精？」

「ぶっ」思わず吹き出す。

「ああ何、見られて興奮したとかそーゆーアレ？　それとも今来たばっかのアタシに興奮しちゃった？　そりゃずいぶん早漏ねー」

「うるさいよ！　い、いきなり何言ってんだあんたはっ」

「ナニの話」うるせえ！

僕をハルちゃんと呼ぶこの女性は二階堂桜子さん――この小手鞠荘の大家で管理人、ついでに現役の女子大生である。

アパートの管理人さんが綺麗な女子大生、なんて、そこだけ聞くとあり得ない幸運のようにも思えるのだが、そんな人が口を開けば最高にセクシャルな発言ばかりが飛び出してくるというこの現実も、かなりあり得ない。

性格はテキトーで行き当たりばったり、食べることと呑むことが大好きで、大学にはたまにしか行かず管理人としての仕事は滅多にやらず、セクハラトークで他人（僕）をおちょくるのが趣味という、本当に残念な美人なのである。基本的にいつもハイなテンションもウザいし、ぶっちゃけ存在自体が少々ウザい。……まあ、エステアさん同様、憎めない人ではあるんだけど。

ちなみに、他の連中は各自昨日から出かけているので、今アパート内にいるのはこの桜子さんと、ライム、エステアさん、そして僕を含めた四人である。

「写生？」とぽかんとした顔で首を傾げるライムが目に入る。いかん、さっさと話題を変えなくては。

「そ、それより、何が大変なんですか？　一人で大騒ぎして……」

「あ、そうだった！　ねえちょっと大変大変どれぐらい大変なのかっていうと大変な変態っていう定番ギャグを言う暇もないぐらい大変なのよ、って言っちゃったわねーあはははは！」

「じゃあ僕、部屋帰って二度寝するんで……ってちょっと、腕掴まないでください」

「何ようハルちゃん、困ってる乙女の悩みを解決もせずに逃げようってゆーの？」ぶー、と頬を膨らませる桜子さん。「せっかちねぇ、人が真面目に話そうとしてるのに」

「してねえだろ明らかに！」

「最悪な男でございますね、春樹様」エステアさんが口を挟む、っていうか何で僕だよ⁉

「まあ早漏では致し方ありませんか」

「あー、だからせっかちなのね」

人を馬鹿にすんのもいい加減にしろよお前ら。

「あーもう、それで、本題は何なんですかっ」

「いやー、何かこうなってみると言うの恥ずかしいんだけどぉ……」

わざとらしくもじもじとする桜子さん。

「いいから言え！」

「んーとね、あのね……」

一旦間を置いてから、桜子さんは言った。

「アタシのパンツが……ないの！」

「じゃあ僕、部屋帰って二度寝するんで……って、だから腕離してくださいよ」

「ちょっとハルちゃん、たまには真面目に人の話聞いてくんないかなあ」

「あんたが言うな！　たまには真面目に話をしろ！」

「ざーんねん、今日はこれマジで真面目な話なのよね。なんとびっくり、普段の会話内容と変わってなーい！　でもそれがアタシ☆クオリティ！　あっはっは！」

笑ってないで少しは恥じろ。

「まあとにかく、パンツがない訳よパンツが。パンツって言ってもただのパンツじゃなくて、アタシの一番お気に入りのパンツなんだけど」

「はあ……」ていうかあんまりパンツパンツ言わないで欲しいんだけど。「いやでも、そんなこと言われたって……」

「え？　だって盗ったのハルちゃんでしょ？」

「知らねえよ！」さも当たり前みたいな顔して言うな！

「さしずめ、少し借りるつもりがあまりの良さについ長引いてしまった、といったところでしょうか」エステアさんちょっと黙っててくれませんかね。
「や、気に入ってもらうのはアタシとしてもまんざらじゃないんだけどねー、ほら、あんまりベタベタになるまで使ってもらっちゃうと、早いトコ洗っ」
「使ってねえよちょっと黙れ！」
「ああ、お穿きになられていたのでございますね」穿く訳ねえだろ⁉
「え、春樹さん、桜子さんの下着穿くんですか……？」
？？？　と疑問符を浮かべまくっているライムが言う。
「は、穿かないよそんなの！」
慌てて首を横にブンブン振る。ああ、ライムは素直なので変な知識は極力持たせたくない。
「ハルちゃんはライムちゃんのパンツしか穿きたくないんだって」
ちょっと待てそこの馬鹿。
「ふぇ？　……わっ、わたしのですか……っ？」途端にボンッと顔が赤くなるライム。「あっ、あの、その……わ、わたしの下着だと、春樹さんには……小さすぎる、と、思うんです……けど……あの……」
うわあ何か始まった！
「で、でもあの……春樹さんが、そんなに……穿いてみたい……の、でしたら……あ、あのう、

わ、わ、わたし、わたし……」
「だあああライムちょっとストップストップ！」
真っ赤な顔で恥ずかしそうにもじもじしながらそんなこと言われたら（しかもふざけてる訳じゃないのだ、ライムはすごく真面目ですごく優しいのである）聞いてるこっちも死ぬほど恥ずかしい。
「あ、あのね、気持ちはありがたい……いやありがたいって言うのも何なんだけど、と、とにかく大丈夫だから、そ、その、僕そういう趣味、ないし……」
「あっ、そ、そうでしたか……す、すみません……はう」
「う、うん……気を遣ってくれて、あの、ありがと……」
うう、何だこの会話……顔から火が出そう。
「うーん、パンツ一つでよくここまで盛り上がれるわねえ」
「馬鹿と変態は紙一重と言いますから」
お前らいい加減にしろよおい。
「てゆーか、何でアタシに対する態度とライムちゃんに対する態度が違うのよう」
「自分の胸に訊いてください」
「ねえねえ、ハルちゃんが揉みたいって言ってるんだけど、どーする？」
「んなこと言ってねえだろ！　何訊いてんだよ何を！」

「ナニ」「それはもういい！」
　あああもう頼むよこの人……。
「でもホントに知らないの？　ほらアレ、黒にちょっとラメ入ってキラキラしてるんだけど穿き心地は最高なヤツ」
「いや具体的に言われても知りませんてば」
　まあ僕だって当番のときは皆の洗濯物を洗ったり干したりするけど、さすがに下着はあんまり見ないようにしてるし。
「ああ、あれでございますか」
　無表情のまま小さく呟くエステアさん。どうやらこの人はそのブツの記憶があるらしい。
「そーそー、アレよアレ。でもホント、どこ行っちゃったのかしら」
　うーん、と腕組みする桜子さん。物が物だけど、こりゃホントに困ってるみたいだな。
　にしても、パンツか……そういえば僕もついこの間、パンツがどうのこうの、って思ってたような気がするんだけど……何だったっけなあ？　どうせ大したことじゃなかったんだろうけど……うーん、ダメだ。覚えてない……まあいいか、とりあえず。
「それで……ないって、いつからないんですか？」
「どうなのかしら、気付いたのはついさっきなんだけどねー。ほら、昨日散らかした服を片付けたりしてたら、ふと」

「ああ……」
　昨日の夜、桜子さんは珍しく大学の友人たちと外でお酒を飲んできて、酔っぱらって帰って来たのだ。そのときリビングにいたのは僕だけだったので、仕方ないから介抱しようとしたのだけれど、
「ちょ、ちょっと桜子さん、玄関で寝ちゃダメですよ」
「なーにより、ウミネコが海で寝てどこが悪いのよう、にゃははっ」
　あんたウミネコじゃないしここ海じゃないしそもそもウミネコは鳥だから海じゃ寝ないだろーが、と全く話にならず。
　結局、ケラケラ笑いながら、お風呂にも入らずそのまま管理人室（という名の単なる桜子さんの部屋）へ行き、僕の目の前で服を脱ぐなり下着姿で寝入ってしまったのである。いやちょっと何か着た方が、と言った僕に、桜子さんは一旦むくりと起き上がってタンスを引っかき回したものの、「……やっぱ着ない！」と叫んで再び布団の中に潜り込んでしまった。散乱した服を片付けてあげる気力も湧かず、僕はげんなりしてその場を後にしたという訳。
「いやー、昨日はさすがに飲み過ぎて、どーも記憶があやふやなトコあんのよね」もう少し自分の健康を大切にしてください。「んでも、アタシてっきりあのときにハルちゃんがどさくさに紛れてパンツ盗んだのかと思ってたんだけどねー」
「だから違うっつーの」まったく……でも確かに、そのときにどこかへ紛れ込んだ可能性はあ

るかもなあ。「んー、最後に穿いたのいつだとか、覚えてます？」
「いやーん、セクハラよハルちゃん」
てめえいい加減にしろよ。
「はいはい冗談ジョーダン。うーんと、いつだったかしら……穿いたばっかの気がするけど、昨日じゃないし……一昨日？　んー、まあ二、三日ぐらい前には穿いてたと思うわね」
ってことは、そのときまでは確実にあった訳だ。やっぱり昨日の件が何か関係してるのかな。
「……あ、セットのブラジャーは？」
そっちも一緒になくなってたら、もう少し原因が絞り込めるかもしれない。
「あらハルちゃん、お姉さんのブラが気になっちゃう？」
うっふん、とわざとらしい声を出す桜子さん。うるせえいいから答えろ。
「はいはいジョークジョーク。んでも、残念だけど最初っから下しか持ってないのよね、アレ」
あ、そうなの？
「アタシ上下の柄、けっこー別々に着てるしねえ。そもそもブラしないことも多いし」残念だけど今はしてるわよん、と胸を寄せて上げる桜子さん。残念じゃないから止めなさいってば。
しかし言われてみればこの人、確かに上下でちぐはぐな下着を身につけていることが多い気がする（何でそんなこと知っているのか、という疑問に一応言い訳させてもらうと、昨日みた

いな事件以外にも、桜子さんはアパート内を下着姿でうろついていることが多々あるのだ。関係ないがお風呂上がりにバスタオル一枚でうろうろするのも常である）。……って、我ながら長い言い訳だなあ……まあいいや。
「……あっ」
ふと、何か思い出したように口を開いたのはライムだ。
「？　どうかしたの？」
「いえ、あの……もしかしたら、お洗濯、したかもしれないような気がして」
「え、アタシのパンツ？」
桜子さんの問いに、たぶんなんですけど、とライム。
「そういえば、黒くて、何だかキラキラした下着、干したような気がします、はい」言いながら、ちょっと恥ずかしそうな様子のライム。何だろ？
「ご心配なさらずともライム様には少々お早いかと存じます」
「エ、エステアっ」顔を赤らめながら怒る主人に、涼しい顔の世話係。
ああ、そういうこと……ていうか何で言っちゃうのかね、この人は。
それにしても、ライムが、黒い下着……うわ、これは、何かすごく……って何考えてんだ僕。
「ハルちゃん顔に出てるわよ」にやにやと桜子さん。うう、しょうがないじゃないか……。
「そ、それより」慌てて話を戻す。「ライム、それいつ頃か解る？」

「あ、は、はいっ……えっと、やっぱり二、三日前だと思いますけれど……ええっと、わたしがお当番だったのは……」
「二日前、一昨日ですね」エステアさんがさらりと呟く。「ということは、その時点までは確実にあったと言ってよいでしょう。もっとも、ライム様の記憶力が信用出来れば、ですが」
「あう……」またも世話係にいじめられて小さくなるご主人様。
「あんまりからかわないであげてくださいよ、エステアさん……だ、大丈夫だよライム、印象に残ってたんだから、きっと間違いないって」
「うう、ありがとうございます、春樹さん……」
「まあどのような印象かという話がまた」それはもういいから言ってやるなよ！　ほら、またライムが一段と顔赤くして縮こまっちゃったし……可哀相に。「さて、冗談はともかく」
この人、ちゃんと主人に敬意を持ってるのかときどき疑わしくなるんだけど。
「一昨日の……お洗濯されたのは午前中でございますね？」頷くライム。「では、少なくともお昼頃までは存在していたと仮定することに致しましょう。この場合の証言としては、春樹様よりはライム様の方が信憑性は高い訳でございますし」
「へ？　……ああ、まあそうですね」さっきも言ったけれど、僕は他の皆の洗濯物、特に下着はあんまり見ないようにしてるし。
しかしそのことを考えてくれたのかと思ったら。

「証言などそもそも不可能でしょう。春樹様はお洗濯の度に興奮して我を忘れていらっしゃいますから」
「してませんよ！」ていうか嫌なら僕に洗濯させないでよ！

何だか話が豪快に逸れまくったりしていたけれど、とにかく纏めるとこんな感じだ。

・桜子さんのパンツが行方不明
・お風呂や脱衣所もよく探したけれど見つからない
・最後の目撃者はライム、二日前つまり一昨日、洗濯して干した
・ただし、夕方取り込むときにあったかどうかは不明
・ライムの洗濯を手伝った人（現在外出中）にもメールで訊いてみたが覚えてなかった
・小手鞠荘では、取り込むまでが当番の仕事。そこから各自持って行って畳んでタンスにしまうのだけれど、そのときあったかどうか、桜子さんも覚えていない
・一昨日はかなり洗濯物が多かった、これは三日前が雨で洗濯をしなかったため
・桜子さんが件のパンツを穿いていたのはおそらくその三日前（まあこれはどうでもいい）

・もう一度桜子さんが確認したところ、他になくなっているパンツは（たぶん）ない
・つまり、昨日洗濯した分については、ちゃんと桜子さんのタンスまで戻ってきた

うん、すごいどうでもいいのにこうして見ると結構ややこしそう。
しかし、本当にどうでもいいと切って捨てる訳にはいかない。パンツ自体はともかく、もし下着泥棒とかだったらこれは問題だからだ。お風呂（脱衣場）も洗濯機も一階にあるので、今は中庭で洗濯物を干しているのだけれど、こうなると面倒でも屋上で干す必要が出て来るかもしれないし。
ただ、下着泥棒のはずがない、といえばその通りなのだ。一昨日は全員が一日中アパート内にいたし、おまけにこっちにはエステアさんがいるのである。小手鞠荘の敷地内に不審者が侵入したならほぼ間違いなく感知できるという彼女（たぶんマジ。インターフォンより早く来客に気付くし）なので、単なる下着泥棒に後れを取ることはまずないだろう。
「結局、風で飛んで行っちゃいました、っていうオチかしらねえ」
リビングのソファーにだらしなく寝そべりながら、桜子さんが言う。タンス内の点検をしたせいでお疲れらしい。
「それならそれでいいんですけどね……いやまあ、良くはないですけど」
「んー、まあまた買って来ればいいっちゃいいんだけど。実は色違いもまだ持ってるし」

「あ、そうなんですか？」
「うん。ふっふっふ……」と、おもむろに胸元へ手を突っ込み。「じゃじゃーん！」
取り出したのは……パンツ、だった。
「って、ど、どこに入れてんですかっ」
「あはは、びっくりした？」いやまあびっくりしたけども。「ライムちゃんに見てもらおうと思って。どう？　こんなだった？」
「えっと……あっ、そうです、こんな感じでした」
うんうんと頷くライム。
ていうかそれも黒じゃん、と思ったのだけれど、模様みたいな感じで入っているラメの色が違うのだそうだ。そこにあるのは赤だけど、なくなったのは銀ラメだとか。……どうでもいいけど、なんでこんな派手なの穿いたりするんだろ……解らん。
「ただのアタシの趣味で、特に理由はないんだけどねー」
「いやちょっとモノローグに返事すんの止めてください」
「大丈夫よ、他の男に見せるためじゃないから。心配しなくても、アタシが見せるのはハルちゃんにだけ！　きゃーうふふっ」うふふじゃねえよウインクすんな。
「……」ライムがちらりと僕の顔を見て、目が合うと慌ててまた逸らす。いやそんな無理してライムがこんなの穿かなくてもいいってば……え、でも、もしかして興味あるってこと？

……って、ああいかん、また変なこと考えそうだ。
「あまりライム様で性的興奮を高められるのはどうかと存じますが」
春樹様ほどの変態では致し方ありませんが、と呟くエステアさんに真っ向から反論出来ない自分が恨めしい。
「あ、そーいえば今洗濯機の中に、ライムちゃんが朝着てた服が入ってたけど」ふと思い出したように桜子さん。「汚したのハルちゃんだったのねえ」
「違うわ」セクハラも大概にしろよ。
「そ、そうですよ、あれは春樹さんのせいじゃなくって、あの、わたしが勝手にお水をこぼしちゃって……」
桜子さんの発言の意味に気付かず、普通に僕をかばってくれるライム。……うう、優しさに涙が出そう。小手鞠荘の良心はもはやライムが一手に引き受けていると言っても過言ではあるまい。
「さて、春樹様の変態性はともかく、一つ気になったことがあるのですが」
「……何ですか」ていうかいちいち僕を馬鹿にすんの止めて欲しいんだけど。
「どなたかが間違えて自室に持って行ってしまった可能性があるかと思いまして」
「ああ……それは確かに」でもあんな派手なパンツ、間違えるかなあ？
「いえ、間違えたというのは、そういった意味ではなく」首を傾げかけた僕に、エステアさんが言う。「気付かぬうちに、です」
気付かぬうちに？　……ああ、そうか。
「そっか、あの日、洗濯物多かったしねえ」桜子さんも頷く。「取り込んで纏めて置いたときに、シャツの中とかに紛れ込んじゃったのかも」
それなら桜子さんのパンツの存在に気付かずに、自分の洗濯物ごと片付けてしまったというのも充分あり得る。
「じゃあわたし、ちょっと確認してみますね」
ライムが立ち上がる。
「念のため私も確認して参ります」
「あ、じゃあ、僕も」エステアさんならまずそんな失敗はないだろうけど、僕やライムなら解らない。
「ごめんねー、皆。よっしゃ、アタシももう一回タンス見てみよっと」
こうして、各自桜子さんのパンツ捜索を開始することとなった。
何だかマヌケな話に聞こえるかもしれないけれど、ここまで来たら引き下がる訳にはいかない。
僕もタンスを引っかき回して、最近着た覚えのある服を、中に何か入っていないかチェックしていった……のだけれど。

しかし。

しかし事件は、予期せぬ方向、というか、さらにややこしい方向へ進んでいくこととなる。

「あ、ハルちゃん、おかえりー」

リビングへ戻ると、桜子さんとエステアさんがすでに捜索を終えて座っていた。

「残念ながら、やっぱアタシのトコにはなかったわー」

「私もです。春樹様はいかがでございましたか」

「あ、はい、やっぱり僕の部屋にもなかった……んです、けど……」

そう、なかった。なかったんだけど、それだけじゃなくて。

「左様でございますか」

「んー、まあしょうがないわよねえ。後は、出かけてる子たちのタンスに入ってるかもしれないけど、勝手に開けるのも何だし」

ありがとね、とひらひら手を振る桜子さん。

「はあ……ええと、あの、実は――」

言いかけた僕の台詞は、しかし飛び込んできたライムの言葉で遮られた。

「あっ、あの、たっ大変……きゃわぁっ!?」

桜子さんみたいに勢いよく入ってきたのはいいが、そのまま躓いてビッターン！　と見事に転ぶライム。

「わっ、ラ、ライム！　大丈夫!?」慌てて駆け寄る。

「うう……す、すみません……」

助け起こすと、涙目のライム。無理に走ったりしちゃダメだってば……まあ怪我ないみたいでよかったけど。

「走られるのでしたら、ご自分のバランス感覚とよくご相談の上、実行なさいませ」

「……あうう……」

エステアさんが追い打ちをかける。だからいじめんなよ……。

「そ、それよりライム、どうしたの？　桜子さんのパンツ、見つかった？」

それで慌てて来たのかと思ったけれど、どうやら違っていたらしい。

「いえ、残念ですがやっぱり見つかりませんでした……なんですけど、あの、その……」

もじもじと何か言いにくそうなライム。

どうしたのだろう、と思って、しかしすぐに一つ、思い至る。

……もしかして。

「どったの？」と桜子さん。

「は、はい、あの……じ、実は……」ちょっと恥ずかしそうに目を伏せながら、ライムは言った。「その……わ、わたしの下着も、一枚……見当たらないんです……」

「え」桜子さんが目を見開く。「ライムちゃんも、パンツ、ないの？」

「あの、は、はい……」
「それは予想外でしたね」エステアさんも呟くように言う。
しかし、僕だけは。
やっぱり……と思わず小さく呟いていた。
「え?」
隣でライムが首を傾げる。
「……?」「何よハルちゃん、やっぱりって?」
怪訝な顔のエステアさんと桜子さんに、僕は口を開く。
「いえ、実は……僕も一枚、パンツがなくなってたんです……」

という訳で、事態はますます訳が解らなくなってしまった。
実はすっかり忘れていたのだけれど、昨日、洗濯物を自室に持ってきて片付けた際、「あれ、パンツってしまったっけ?」とちょっと首を傾げたのだ。まあいいや、と思ってそのまま忘却してしまっていた。タンスをごそごそやってて、ようやくそのことを思い出した。あのときすでに、僕のパンツもなくなっていたのだろう。
しかし、一体誰が何に使うというのか……いやあんまり聞きたくもないけど。

まあ僕のパンツなんかは本当にどうでもいいとして、問題はライムだ。
桜子さんは一昨日の洗濯の後、僕は昨日の洗濯の後にパンツを紛失した。
しかし、そもそもライムは、なくなったそのパンツをここ一週間は穿いた記憶がないらしいのだ。つまりタンスの中に入れっぱなしで洗濯には出されていないはず。なのになくなっているというのは……おかしい。実におかしい。こうなってくるとやはり人為的な原因が考えられるのだけれど、下着泥棒がアパートの中まで侵入してきたというのだろうか? 僕たちやエステアさんの目をすり抜けて? ……どうなってるんだ?
「いつからないのかは、ちょっと解らないですねー……」
ちょっと沈んだような顔でライムが言う。
……おのれ、他はともかくライムのを持って行くとは……許せん。泥棒だったらただじゃおかないぞ……ぬうう。
「んー、他の子もなくなってるの、あるのかなあ。帰って来たら訊いてみないと……って、ねえハルちゃん、ライムちゃんのもなくなったって聞いてから、何か目の色変わってない?」
「……気のせいですよ」気のせいなもんか許すまじ!
「ちなみに私のはなくなっておりませんでした」エステアさんが言う。まあ、自分のがなくなってればすぐ気付きそうだしなあ、この人。「しかし、ここ数日で私が外出した機会は数えるほどしかなかったはず。そのタイミングを狙われた、というのもどうも腑に落ちません」

「そうですね、エステア、ほとんどずっと小手鞠荘にいましたし……」ライムも呟く。
「ってことは、逆に言えばずっといたエステアさんが犯人だったりして……」
はは、と笑ってみたのだけれど、
「バレてしまいましたか」って認めたよ⁉「皆様の下着が気になりまして、つい」
「え、ちょっ、マジで！？」ここまで来てそれ⁉
「冗談に決まっておりますが。早漏も大概になさいませ」
「殴りますよ」
ああもうこの人は……！
「それはともかくとして。春樹様、なくなった下着の色は覚えていらっしゃいますか？」
「色？　ええと……あ、そうだ、確か紺色の……」
「ああ、あのショートボクサーでございましたか」
「そうショートボクサー……って何で知ってんですかっ」
「洗濯時に拝見しました皆様のお召し物は大概記憶しておりますので。春樹様の紺色の下着と言ったらあの一枚しかございません」
すごいな……と思ったのだけれど、何故か桜子さんも「あー、アレね」などと頷(うなず)いていた。
「え、なんで桜子さんも知って……」
「だってアタシ管理人さんだから！」いや別に僕の下着を管理してる訳じゃないでしょ？

「……」ちらちらとライムも僕を見ている……え、何⁉　ライムも覚えてんの⁉　なんで僕の下着事情を皆記憶してんだよ⁉
うわあ、何かこの場にいるのがすごく恥ずかしくなってきたんだけど……うう。
「あのショートボクサー、柄はご記憶ありませんか？」
「柄ですか？　あれは無地……あ、じゃないか」
「そうです、メーカーのロゴがかなり大きく入っております」
僕より早くエステアさんが頷く。
「そこまでは、確かに良いのですが……」無表情のままではあるが、何か考えるかのように腕を組むエステアさん。
「いい、って……何か解ったんですか？」こっちは全然見えてこないんだけど。
「どうでしょうか。全て解った訳ではありませんが……ライム様は、どのような下着で？」
「え、あの……」答えにくそうなライムに、しかしエステアさんは容赦ない。
「そこが重要な要素になって参ります」
「ふ、普通の……水色の、です……」恥ずかしそうに言うライム。エステアさんもわざわざ言わせなくても、と思ったけれど、わざわざ言わせたんだろうな、きっと……。
「最近穿いていないとなると、あの小さなリボンの付いている物ですね」
「……そ、そうです、けど……うう……」

それも言わなくていいのに……まったく。……でも、ちっちゃなリボンか……うん、何か、ライムっぽい……ってまた何考えてんだ僕は。

なるほど、と独り呟いた後、エステアさんはしばらく口を閉ざした。

しかしやがて、「ひとまず張りましょう」と僕たちに向け言う。

「張る？」

「ええ。干してある洗濯物の張り込みです。少々面倒ではありますが、私が行います」

「いやあの、その前に……何か解ったんなら、教えてくださいよ」

「検討外れでは困りますので」とエステアさん。別に間違ってたっていいのに。「ともかく、張り込んでいれば多少謎は解けるでしょう」

「……え？　犯人、今日も来るってことですか？」

「確実ではありませんが、おそらくは。餌さえあれば、でございますが」

「餌……」餌、ねえ。一昨日は桜子さん、昨日は僕のパンツが、犯人を引き寄せてたってこと？

「それはいいんだけどさー」桜子さんが口を挟む。「アタシが発端なんだし、アタシもやるわよ。張り込みなんてメンドーなこと、一人に押し付ける訳にゃあいかないってね」

「……そーですね。僕もやりますよ」

面倒くさがりの桜子さんに言われるまでもない。よく解んないけど、手伝えることがあるのならエステアさん一人に押し付けたままには出来ないよね、やっぱり。

「わたしも手伝いますよ、エステアっ」

ライムもぴょんと跳ねる。

「……そうですか」エステアさんが頷く。表情はピクリとも動かないけれど、怒っている訳ではないので誰も気にしない。「それでは、少しずつ交代で見張ると致しましょう」

それと、とエステアさんは桜子さんに向き直る。

「桜子様、さきほどの下着、お借りしてもよろしいですか？」

「ああ、これ？　いいわよ」スル、と再び胸の谷間から黒い布きれを取り出す桜子さん。……ていうかなんでまたそこに入れてたのか理解に苦しむんだけど。

「それが餌ですか？」僕の問いに、エステアさんは頷く。

「他の物でもいいのですが、色違いとはいえ一度は狙った物です、再度狙われる可能性は高いかと」犯人の好みだってことか。

「……でも逆に、似たようなものはもういらないかもしれませんよ？」

「その心配はないでしょう。……張り込む前に、予め言ってしまいますが」見当外れでもご容赦を、とエステアさんは呟き、そして。「おそらく、犯人は――」

「春樹さん」
かけられた声に振り向くと、ライムが「どうですか？」と微笑んでくれた。
「うん、今のところは何とも」
そう頷いて、僕はまた視線を外へと戻した。
張り込むといっても、リビングの窓（ガラスの引き戸）から中庭の洗濯物の様子をずっと眺めているだけだ。桜子さんから僕に交代してぼちぼち二十分ほど経つのだけれど、その間何の変化もない。正直すごい暇で逆に疲れる。屋内にいる僕ですらこれなのだから、本職の刑事さんなんかはすごく大変なんだろうな、としみじみ思ってしまう。
「来るでしょうかー……」
「どうだろね……こればっかりはなあ」そう、何とも言えない。エステアさんの予想通りなら、来てもおかしくないし、来なくたって別におかしくはないのだ。
とそのとき、ふと僕のお腹が、ぐぅ～、と鳴る。
「あ……」
「ふふっ」ライムが小さく笑う。うう、恥ずかしい。「あ、今エステアがお昼ご飯を作ってますから、もう少し待っててくださいね」
あ、もうそんな時間か。朝ご飯食べたばっかりみたいな感じだけど、確かにお腹は減ってるし。

「……あ」そうだ、朝といえば。
「？　どうかしましたか？」
「いや、ちょっと、思い出したんだけどさ。ええと、訊いていいのかアレなんだけど……」まあいいや言っちゃえ、と僕は首を傾げているライムに尋ねる。「あの……ライムさ、今朝、ゼリー作ってくれようとしたけど……あれさ、どうして一人でやろうとしたのかな、って思って」
手伝おうとしても、一人でやることに何か妙にこだわってたし。普段ならそんなことないのに。
「あ……あの、それは……」わずかに目を伏せるライム。
「あ、ごめん、別にあの、無理に訊きたい訳じゃなくて、言いたくなかったら、別に……」
「い、いえ、そういう訳じゃないんですけれど……あの、実は……う、占いなんです」
占い？
「その、占いというか、おまじないというか……」恥ずかしそうにしながらライムが言う。
「えっと……これなんですけど」
リビングの片隅のマガジンラックから、ライムは一冊の薄い雑誌を取り出す。
その名も『はっぴー☆おまじない大全！』だそうだ。こんなのあったのか、気が付かなかった。ていうかコレ、見た感じだともっと小さな女の子が読む本じゃないのか？

あ、だからライム、言いにくかったのか……うーん、本人には悪いけど、そういうところ、すごく和むよなあ、ライムって。それで恥ずかしそうにしてたのか、と思うと、実に可愛らしく感じてしまうのも無理ないことだろう、うん。

「それであの、これなんですけど……」ライムが開いたページには、『カラフル占い』と書いてあった。好きな色を選んで、そこからあみだくじで運勢を占うという簡単な奴らしい。「わたし、青色を選んで、やってみたんです。そしたら……」

やっぱり青か。ライムの色って感じするしなあ。

どれどれ、と青色を辿っていくと、結果には『自分一人の力で、何かにチャレンジしてみよう！　きっといいことあるよ！』とあった。なるほど、そういう訳ね。

「……でも結局、失敗しちゃいました」はふう、と雑誌をしまいながらため息をつくライム。

「……」その顔がホントに残念そうだったので、僕はつい口を開く。「いいじゃない、失敗したって」

え？　と首を傾げるライム。

「だって、別に成功しろとは書いてなかったよ？　ライム、ちゃんとチャレンジしたんだから」

だからきっと、いいことあるよ。

「春樹さん……」

微笑んだ僕に、しかしライムはまた顔を伏せてしまう。な、何か気に障ったかな。

「あの……そうかも、そうかもしれないんですけど……」ぽつり、と。彼女は呟く。「でも……ちゃんと、作りたかったんです。春樹さんに、ゼリー、食べてもらいたかったんです……」

「ライム……」

ああ……と僕は心の中で思う。

こんな優しい人と一緒にいられて、同じアパートにいられて、僕は本当に幸せだなあ。

「ライム、いいんだよ。そんなに気にしなくてもさ、頑張って作ってくれようとしただけで、僕すごく嬉しかったから」

「……」

「だからさ、よかったら今度は一緒に作ろうよ。そしたらきっと、もっと楽しいよ」

「春樹、さん……」また少し顔を伏せたライムだったけれど、何かを振り払うように、小さく頭を振る。そして再び顔を上げたとき、「……はいっ、じゃあ、楽しみにしてますねっ」もうその表情は明るくて。嬉しそうに、微笑んでいた。

えへへ、と恥ずかしそうに笑うライムの笑顔が、一瞬やばいぐらいに可愛く見えて、なぜか僕は思わず視線を逸らしてしまった。ああ、やれやれ……ん？　あれ、視線……あっ、しまった、見張りのことすっかり忘れ「あっ」てた――って何ライム、声あげてどうしたの？

「は、春樹さん、あれっ」

「え」指差されるままに中庭を見ると。「……あっ、き、来たっ!?」
颯爽と飛び込んできた、そう、文字通り飛んできた黒い影。
――カラスだ！　エステアさんの予想通り！
「て、ていうかやばい、餌が持ってかれるっ」
汚れないように透明なビニール袋に入れて、さらに十連ピンチ（靴下とか干すアレ）の洗濯挟みで挟みまくっておいたのだけれど、カラスは嘴で桜子さんのパンツを咥えると、翼の羽ばたきと並行してなんかすごい力で引っ張り始めたのだ。
「い、行こうっ」
慌てて引き戸を開け、中庭へ飛び出す。
「エ、エステアっ、来ましたよっ」キッチンにいるのであろうエステアさんに叫んでから、ライムも僕に続いて中庭へ。
「こら止めろお前っ」威嚇のつもりで叫んだがカラスは少しも動じていない。それどころか洗濯挟みが、バチ、バチッ、と次々に外れていく。
カラスまでまだ距離がある、やばい、間に合わない――瞬間。
僕は反射的に真横に跳び、叫ぶ。
「ライムっ！」
「は、はいっ！」声と同時に何か細長い物体が、僕の横を凄い勢いで通過して行く。

そのまま伸び続けて行くそれは、あっという間に距離を詰め、ついにはパンツの入ったビニール袋――にもカラスにも、残念ながらかすりもしなかった。
その代わり、ピンチに勢いよくぶつかる。その衝撃で驚いたのか、カラスは嘴をパンツから離し、そのまま飛び去ろうと上昇していく。
「あっ、くそ、逃げてっちゃう……」
「お任せください」
ザッ、と中庭に降り立ったのはエステアさん。
「巣まで追います。では」
再びザッと地面を蹴り、エステアさんは跳ねるようにしてカラスの後を追っていった。……相手が空飛んでもエステアさんなら追えそうだけど、あんまり人間離れした無茶な追跡して、一般地球人の方を驚かせないようにして欲しいところだ。
「ふう……あー、びっくりした」
「ほ、本当ですね……カラスだと解っていても、驚きました……」はふー、とライムが息をつく。そう、カラス。下着泥棒の犯人は、人間ではなくカラスだったのだ。
カラスは光るものを集める習性がある、というのを聞いたことはないだろうか。
僕はほとんどフィクションだと思っていたのだけれど、中には本当にそんな行動を取る奴もちゃんといるらしい。それにしても、いくら光るとはいえ、ラメに惹かれてパンツを盗る奴が

いるとは、まったく変わったカラスもいたもんだ。僕のパンツには、メーカーのロゴが銀の箔押しプリントで入っていた。どうやらそれも気に入った、ってことなんだろう。やれやれだ。

「でも、何とか餌は持ってかれずに済んだね」

残り洗濯挟み一個で、ピンチにぶら下がっている桜子さんのパンツINビニール袋を見ながら、僕は言う。

「ですねー。たとえピンチにでも、腕が当たってくれて、よかったです」ほっとした感じで笑うライムの、ワンピースの袖から覗く、その右腕。青く透き通り、日の光に煌めく。まさにゼリーのようなその腕は、洗濯物のところまで、触手のように細長く数メートルも伸ばされていた。そしてそれは、シュル、と短くなっていき、普通の腕の長さぐらいにまで縮むと、スゥ、と肌の色が僕たちと同じ色に戻る。これで元通り、という訳だ。

お忘れかもしれないが、ライムはスライム型の宇宙人である。こうして身体の一部分だけをスライム化させることも可能なのだ。ただし、そもそも運動神経いまいちのライムは、スライム化しても自由自在という訳にはいかず、正直、数メートル先のターゲットを一直線に狙うのはかなり無謀な賭けだった。もちろん突然あれを思い立った訳ではなく、あらかじめ「こういう場合はこうする」みたいな話はしていた。それでもどうなるのか解らなかったけれど、まあ結果的に上手くいって、何よりだ。

あ、今気付いたけど、ライムも僕も、靴も履かずに外出ちゃってたなあ……まあいっか。

「どうだった？　来た！？　パンツ盗られた！？」

ドタドタと慌てたように顔を出した桜子さんに、「やりましたよ」とパンツINビニール袋を指差す。

「やっぱりカラスでした。エステアが今追いかけてます」

ライムの言葉に、「そっかそっか！」と桜子さんも中庭へ。

そして僕とライムの頭をガシッと両脇に挟むと、

「いやー無事解決ね！　ありがとう諸君！　にゃははは っ」

と、苦しむ僕たちを無視して、楽しそうに笑った。

ていうかあなたも靴履かずに……とちょっと思ったのだけれど。

まあそんなことは、いっか。

それに、問題はまだ、全て解決した訳じゃないのだ。

「予想通り、巣には大量の光るものが溜め込まれておりました」

三十分もしないうちに戻ってきたエステアさんは、昼食の準備の続きをしながら口を開く。

「お二人の下着はもちろん、他にも光る部分のある下着が何十枚も」

「完全に趣味ねえ」桜子さんがうんうんと頷く。「それしても、カラスですら惚れるこのアタ

シのオーラ……自分が怖いわ」
「僕もあんたが怖いよ違う意味で」ていうかその理論だと僕もカラスに惚れられてたことになるんだけど。
「さすがに再使用は不可能と判断しましたので、お二人の分は破棄して参りました」
「まっ、しょーがないわね。今度また新しいの買いに行こっと」まだラメ違いもあるしね。
「でも、今までは盗られたりしなかったのに、なんで最近になって……」
「それはですね」尋ねた僕に、エステアさんが答える。「巣の感じからして、おそらくはごく最近他の土地から越してきたばかりなのでしょう。ともかく、このままではまた狙われる洗濯物が出てこないとも限りませんので、私が再度巣ごと山奥へ強制移送しておきました」
この短時間でそんなことまでやってたのか……頼りにはなるけどホント無茶苦茶な人だなあ。
「ひとまず、こっちの件は解決ですね」
「はい。残るはライム様の件です」
「そうですねー……」当人のライムも、うーん、と首を捻った。
確かにこれで、桜子さんと僕のパンツの件は一応の決着を見た。しかし問題なのはライムである。光りもしない、そもそも洗って干してもいなかったパンツを、カラスが持って行くはずはないのだ。状況こそ似ているものの、ライムは僕たちとはまた別の事件に巻き込まれたとしか考えられない。いつなくなったのかも、はっきりとしないし。

「わたしも、もう少し探してみます。どこかにひょっこり紛れ込んでいるかもしれませんし」
あ、そうそう、他の人たちのタンスに紛れ込んでる可能性はまだあるんだったっけ。
「ハルちゃん、やっぱりライムちゃんのが穿きたくてしょうがなかった、って認めるなら今のうちよ?」だから違うっつーの。「ま、他の子たちが帰って来たら訊いてみて、もしなかったら、アタシと一緒に買いに行きましょ」
「ありがとうございます、桜子さんっ」
ぺこりと頭を下げるライム。
やれやれ、何はともかく、一件落着か。
でも、どこにいっちゃったんだろうなあ、ライムのパンツ……。

◆

さて。
実はライムのパンツは、それからすぐ、他の皆が帰ってくる前に発見された。
原因は意外なことに『はっぴー☆おまじない大全！』だった。実は僕がぱらぱらとめくっていたら、こんな占い（というかおまじない）があったのである。
『楽しいことが起きるおまじない　年下の女の子から、普段よく身に付けている物（タオルや

ハンカチでもオッケー！）を一晩借りて、枕の下に入れて寝てみよう！』

「……ん？　んん？」

・ライムのパンツが行方不明
・お風呂や脱衣所もよく探したけれど見つからない
・最後の目撃者はライム、ただし一週間は穿いていない、というだけで、正確にいつなくなったか、あるいはいつまでならタンスにあったのかは不明
・ところで『はっぴー☆おまじない大全！』がいつからあったのか解らない
・後で他の皆にも確認したところ、誰も知らない
・今朝読んだライムが最初の目撃者かと思われる、そうなると昨日から今朝にかけて『はっぴー☆おまじない大全！』は小手鞠荘にやってきた可能性が高い
・ところで昨日、桜子さんは思いっきり酔っていた
・酔っていた桜子さんは、昨日の記憶がところどころ飛んでいる
・もしかしたら帰りにどこかで『はっぴー☆おまじない大全！』を買ってきた可能性もある
・僕の目の前で眠りについたけれど、その後夜中に起きた可能性はある
・『はっぴー☆おまじない大全！』を意味もなく読んだ可能性はある

・『楽しいことが起きるおまじない』が目に留まった可能性はある
・夜中なので皆寝ている
・年下の女の子の部屋へ侵入した可能性がある
・その子の部屋から何かを勝手に借りた可能性がある
・その子がライムで、何かがパンツである可能性がある
・ライムのパンツを枕の下に入れて寝てみた可能性がある
・翌朝目が覚めた桜子さんは、それらのことを記憶していない可能性がある

という訳で、その後桜子さんがライムを連れて出かけ、あれこれ下着を買ってあげたことは、想像に難くないであろう。

問題はそこでライムが例の黒いパンツを買ったのかどうかということなんだけれど――

まあその話は、またいずれ。

小手鞠荘は末期です。……詳しく。

入門編・小手鞠荘の割とどうでもいい一日

発　行　　2011年5月15日
著　者　　月島雅也
発行人　　新田光敏

発行所　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
電話　03－5549－1201
03－5549－1167（編集）

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
© Masaya Tsukishima
Printed in Japan

GA 文庫